

男性性表象を保証する資源と権力関係代： コンタクトスポーツの表象分析からの研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川野, 佐江子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4821

男性性表象を保証する資源と権力関係代 —コンタクトスポーツの表象分析からの研究—

学芸学部 化粧ファッション学科 川野 佐江子

【研究目的】

本研究では、R.W. コンネルが示した「覇権的男性性」概念を援用し、その「覇権的男性性」を保証する資源と権力関係について検討する。その際、メディアで表象され、特に競技者の“男らしい肉体”が着目されるコンタクトスポーツ—プロレス（本研究ではアメリカのプロレス団体 WWE を取り上げる。以下「プロレス」と表記する）、大相撲—とその競技者の身体が表象する「男らしさ」を通して検討する。

【研究方法】

本研究の理論的背景は、R.W. コンネルの示した「覇権的男性性」「従属的男性性」「共犯的男性性」「周縁的男性性」という4つの男性性の権力関係モデルで、このモデルでは、これら4つの男性性がある時は協働し、ある時は相互に葛藤しながら、総体として男性中心社会を形成し維持していくことに荷担するという構図が示された。これを背景に、プロレスにおける男性性の表象は、WWE（前身 WWF）レッスルマニア大会出場のレスラーを対象に、大相撲では、戦後の相撲ブームで中心となった力士を対象に、「審美的身体（競技者として称賛される外見的・技術的・人格的審美性）」、「正統的身体（健全さ、人種主義と国籍、ジェンダー等社会的構築物）」に関わる表象（言説、画像、映像、音声）を抽出し、彼らの「男らしさ」を表象する資源が何なのかを調査する。

【結果と考察】

プロレスについて Barthes は「プロレスの美点は、それが過度なスペクタクルということである」（Barthes、1957=2005）（あるいは「度を超えた見世物」（Barthes、1954=1967））と指摘し、小林は「『プロレスはジャンルの鬼子』と呼ばれるほど、定義付け困難な文化的領域といわれる」（小林、2002）と述べる。一方大相撲も西村が「近代スポーツにおける判定の客観的合理化の流れとは逆行している。ここに、大相撲が純粋なスポーツに徹しきれない性格、すなわち大相撲の芸能性がある」（西村、2001）と指摘する。こう指摘されるプロレスと大相

撲をコンネルの権力関係構図にあてはめてみると、次のようなことが分析される。

例えばブルジョア的人間形成のために学校教育に取り入れられるなど、西欧において近代エリートスポーツの「正統的身体」を根拠にした「覇権的男性性」を表象するコンタクトスポーツにラグビーが挙げられる。一方プロレスはその存在目的が“興業”であるという側面から近代スポーツ精神の視点からは「従属的あるいは周縁化」された競技として目される。しかし同時に、ラグビーとプロレスは双方とも従来型の合理的に鍛え上げられた「審美的身体」を示すことで「共犯的」に覇権的男性性を維持することに加担している。一方大相撲は、伝統的・宗教的・興行的・非西欧的である点で、西欧を発祥とする近代スポーツからは完全に「周縁化」されているが、近年の学生相撲では競技の勝敗、身体訓練や管理方法などに近代スポーツの手法を取り入れており、その意味で相撲は周縁に固定化されているのではなく、いつでも従属的、共犯的な立場へ転向可能である。そして同時に、“日本の伝統”の視点からは相変わらず「覇権的男性性」から降りることはない。

このように、コンネルの述べる4つの男性性モデルの具体的資源は、決して固定的なものではなく、むしろ社会状況によって変容するものであって、その変容すること自体がその社会における権力関係を表すものと言える。今後はさらに、文化、地域、時代などを踏まえた調査が必要である。

【参考文献】

- Connell R.W.（森重雄ほか）（1987 = 1993）ジェンダーと権力 セクシュアリティの社会学、三交社
Barthes R（下澤和義）（1957=2005）現代社会の神話、みすず書房／Barthes R（篠沢秀夫）（1957 = 1967）神話作用、現代思想社
小林正幸（2002）プロレス社会学への招待 イデオロギーとテクスチュア、現代思想、30（3）：96-110.
西村秀樹（2001）大相撲における立ち合いの文化論、スポーツ社会学研究 Vol.9